

和田 靖先生を送る

鈴木 増雄 (物理学教室)

和田先生は1954年に本学理学部物理学科を卒業された後、東京教育大学大学院理学系研究科物理学専攻に進まれ、1959年博士課程を修了されると同時に、本学理学部物理学教室助手になられて本郷に戻ってこられました。それ以来、海外での研究のための休職期間を除けば、現在に至るまで本学で研究と教育に尽力されてこられました。1962年8月から3年間アメリカで研究生活を送られ、1965年9月に帰国されました。丁度、私が久保研の博士課程に在学中のことであり、超伝導理論をご専門とする若い和田先生が帰国され、10月には講師となられて、物性理論分野も賑やかになりました。私もその当時、磁気不純物によって超伝導転移温度がどう変化するかを理論的に計算していたこともあって、和田先生の着任は強く印象に残っております。和田先生はセミナーでの質問が手厳しく、少しでも理論的に飛躍があると追究の手を緩めず、院生をたじたじさせていました。私もそういう和田先生の厳しい質問のおかげで随分と勉強になったように記憶しております。その後、私は久保先生の助手になり、同じグループで引続き和田先生と一緒に過ごさせて頂きました。和田先生は1967年7月に助教授になられ、和田研では、海老沢、高山の両氏が院生として活躍し始めていました。翌年の2月に私の方が物性研に転出しましたので、一時、縁が遠くなりましたが、1973年11月に本郷に戻って以来現在に至るまでずっといろいろなお付き合いさせて頂いております。

和田先生は、1979年11月に教授になられ、1983年には理系委員、翌年には大学院理学系研

究科物理学専門課程主任になられました。そのときに和田先生の開発された院試の事務処理ソフトは最近まで非常に役立ってきました。何ヵ月もかけて大変苦勞して作られたと伺っております。このように和田先生は、何事も徹底しておやりになる性格の方で、一旦決めたら変更を認めず最後までやり抜くという強靱な精神の持ち主で、いろいろな機会に私などはいつも圧倒されてきました。講義も几帳面だったと学生から伺っております。

ご研究の面でも、強結合超伝導、第二種超伝導でのアプリコソフ構造、ポリアセチレンでのソリトン、特にシュリーファーとの共著であるソリトンのブラウン運動の研究など数々の成果をあげてこられました。

和田先生が指導された院生の数も30人以上にのぼり、また、研究・教育行政の面でも、大学設置審議会専門委員や物性研究所協議会委員として活躍されました。物理教室の教官会議でも、最近では印象的な発言が多かったように思います。4月から、そういう迫力のあるご意見を伺えなくなるのは淋しいような気も致します。

毎年春から秋に少なくとも一回は、若い院生を伴って和田先生と私は一緒に尾瀬等によく出かけました。温泉につかった後で一緒に飲んだビールのうまかったことが懐かしく思い出されます。

ご退官後は、山形で教育と研究を続けられるとのこと。あちらでは、温泉のある大学の宿舎に入られるそうで、うらやましい限りです。東大とはまた趣の異なる新しい生活を大いに楽しめられますよう祈っております。